

いい所が残っているというのに、今迄、子供達を連れて来たことはなかったのだ。

しばらく行った所で、もう子供達は前に進まなくなつてしまった。沢へ入って水あそびをはじめてしまつて、もうそれに夢中なのだ。靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、冷い冷いといいながら、足で水と砂の感触を楽しんでいる。

もうこうなつたらテコでも動かさない。私はもう、山道の方はあきらめることにした。

一日おいて五月五日、全く同じ所へ行くなどということは愚の骨頂だと思ふけれど、考えれば考える程残念だったので、今度は大人達だけ、友達を三人さそつて再び湯袋峠から上曾への道へ入る。

むせかえるような五月の新緑の中、音といえば、うぐいすの鳴き声ばかり、山つつぢの赤。藤の紫。皆くちぐちに

「いいなあ、いいなあ」という。

次に出る言葉は、

「勿体ないなあ、」

「こんな道路が舗装になるなんて……」

道ばたにワラビがニヨキニヨキ。連休だというのに、かとうづれる人もないらしい。

タラの芽も、まだ充分食べられる大きさである。

「しめしめ、今日のおかずはタラの芽の天ブラにワラビの味ソ汁にしよう」

主婦というものは、山へ来ていても、晩のオカズのことを心配する、いとも、あわれな習性のある動物らしい。ウグイスの鳴き声も、何回もきいているとシャガレ声あり、高音、低音あり、かなり個性があることがわかる。

一人でききながら、今のは一等賞。さっきのは五等賞などとコンクールまがいの等を授けるのも、相手が、姿の見えぬウグイスだけに罪のない話である。

山道で、オニギリを食べただけの一日だったけれど、自然が残っていた、おそらく、最後の尊いものを満きつした……ひどく、ぜいたくな休日だったと思つている。

## 散 歩 道

私は体力作りの一つとして、毎日歩くことを実行しているものです。歩くといつても勤めにいく途順を利用するので、歩く道は自づと決まっています。(六号国道の